2013/6/19　香川県　青野豊一

「縮小社会」を論ずるための基礎作業

・・・私にとっての「社会」、私たちは今、どのような社会意識状況にいるのか?
また、どのような集団性の中にいるのか?
社会運動に可能性はあるのか・・・

目次

社会とは、何? 社会意識についての現象学的思考

1　心に問う!
2　社会の存在を信じるとは?
3　ジャガイモ栽培と社会認識-ドイツとフランスの差異-
4　フッサールの現象学、「本質観取」について
5　二つの社会像
6　日本社会の問題点

絶望か、希望か?---社会運動の可能性---

1　私たちは今、どのような集団性の中にいるのか?
　① <世間への視線>
　② <「相互不干渉」という自由---西研(和光大学)>
　③ <「他人指向型」の社会心理---リースマン>
　④ <ネット社会を生きる---孤独な社会への窓--->
2　イノベーター理論
　① 「普及率 16%の論理(イノベーター理論)」で考える
　② 前期追随者 34.0%の層の人たちまで運動を広げていくために

補説　国家行政システム上の問題

社会意識についての現象学的思考

1　心に問う

「縮小社会」について論じるにしても、そもそも縮小する「社会」とはいかなるものであろうか。このことを不問にして、縮小を問うことをしてはならない。まず、「社会」とは何であろうか。そして、「社会」って、私たちにとって、どのような時に意識して、どのようなものとして感じ取られているのであろうか。そして、いかなる働きをしているものなのか、どのような意味をもっているかを、今しばらく、しつこく考えていきたい。

私は、このことを、自分の心との対話で、「社会」なるものについて考えてみようと思う。私は、この「社会」をいかなるものと意識したり、イメージしているのであろうか。こ

れをはっきりさせなくては、「縮小」を論じることはできない、と思われる。
「社会」という言葉を思い出してみよう。社会的現象、社会意識、社会変革、サルの社会、ミツバチの社会性等、次々と出てくる。ここから分かることは、一個人のしていることや、意識のことではないことが分かる。多数の人たちに関わる集団的な現象や意識等のことであることも分かる。
まずは、この「社会」なるものを、どのような時に、どのように感じ取るのであろうか。ここから考えてみたい。
人は時には、自分の人生の存在理由を心に問うことがある。「私はどうして生きているのであろうか?その意味は何であろうか?」「私は何故、このような私なのか?何故、他の生き方ができないのか?」「私の社会的な使命は何なのか?それはあるのか、ないのか?」等々と。
また、その人固有の思いもある。「私は何故、こんなにも運が悪いのか?幸せな人もいるのに。」「何故、私の子供は死ななければならないのか?隣を一緒に歩いていた人は助かったのに!」
このような思いは、その当事者でなければ分からない事である。このような問いを抱えている人に、
「そのような意識自体が、社会的に規定されているのだ。」
なんて言ってみても、そのことに関係する社会問題を熱く語っても、当事者の心にはちっとも響かない。このようなことを語る人とは関わりたくない気持ちにさせるだけである。そして、
「ええかっこするな。そんなのは、あなたの勝手な意見ではないか。」
と思われるかもしれない。
このような意識の時は、「社会」なんていうものは、テレビや新聞の中で語られるだけで、自分とはまったく関係のないものとされている。また、人は天下国家について論じるが、それはその人の意見であって、個々人にとって、私にとっての社会総体を見通せる理論なんてあるはずもない、と・・・。
このような意識を抱くということは、人が日々生きていく上では、社会について考えても、社会意識をもっていても、それだけではどうにもならないのであり、生活に直接大きな影響を及ぼすものではないということである。つまり、私個人にとっては、この「社会」意識は間接的作用しかもたらさないものである、ということを意味している。だから、このようなものを意識しなくても、生きていくことができるのだ。「縮小」する「社会」についてなど、考えることなどしなくても、日々生きていけるのだ。自分の容姿やファッション等を気にしたり、おいしい食べ物を求め歩いても、充分楽しく生きられるのだ。
妻は次のようによく言う。
「社会や歴史のことなど知らなくても、何にも困らない。人前でちょっと恥ずかしくなるだけで・・・。」

でも、このおいしいという意識は、実はその人個人だけがもつ意識ではない。ファッションも、そうである。他の人たちの意見や視線なくして、美しさやカッコよさの意識は成立しない。このような意識は、実は社会意識そのものなのだが、このことについては、ここではこれ以上深く思考しないことにしよう。

ただ、今までの社会思想家やマルクス主義者たちやナショナリストたちは、社会問題の解決や国家に献身することが素晴らしいとする物語を人々に与えたが、このようなこれまでの社会的思考だけでは、先に書いたような人たちの抱く実存的な問いに答えられないことは、間違いない。

これは、「社会」なるものが具体的な感情や直接的な対人関係に比べて、実用性の薄い一種の思い描かれた世界観でしかなく、直接的に経験することが難しいものであるためだろう。

だからと言って、「社会」や「歴史」や「世界」や「人類」ということにまったく関わらないで生きようとすると、これはまったく行き詰ってしまう。人は実存的問いを抱いた時、その個人に固有の問題を、社会化されない個人的問題を考えようとした時、この「社会」なるものとの関わりなくては、解決の方向さえ見えてこない。これは、間違いないことである。友人や知人に相談した時、また文学作品に回答やそのヒントを求めた時、歴代の思想家の言葉に救いを求めた時、実はその時、今まで一度も会ったことも見たこともない人々の存在を意識しているのであって、その人たちが自分とよく似た種類の問題を抱いていたことを信じていることになる。

つまり、「社会」なるものを無視しようとしても、実際は、自分の周囲の人々との直接的関係を越えた人と人との関係を、つまり、社会的諸関係を前提にして思考しているのだ。本当は、好むと好まざるに関わらず、「社会」なるものの存在を前提にして思考し行動していることになる。

だから、社会問題のことがまったく気にならない人など、いないのだ。この差は、社会に積極的に関わろうとするのか、それとも消極的態度をとるか、そのことへの姿勢の違いであり、それがこのような意見となって現れ出ているだけであると言えよう。

自分の将来像を思い描いたり、どのような職に就くのか、どのような老後を過ごすのか、などと考えたりすることが、「社会」なるものについての一定の像を前提にしないと成立しないものである。つまり、もっとはっきり言えば、社会認識を放棄しようとするのであれば、自分の日々の生活も、人生観も、思い描くことがとてもできないものである、と言えよう。

ここまでのことを整理すると、自分の心に問うと、社会意識は、

① 「社会」なるものは、具体的な物や人との関係ではなくして、二次的に思い描かれたものである。

② この「社会」なるものの存在に対する個々人の姿勢によって、その時の社会経済状況によって、そこに暮らしている人たちの社会像が異なってくるものである。

③ だから、この異なっている社会観を巡って対立が生じることになる。
④ 「社会」の存在を積極的に信じるということで初めて、はっきりとした社会認識の成立を意識することができ、それが個々バラバラなものとしてではなくして、あるまとまった像(イメージ)としてそれなりの妥当性もって意識されてくる。
⑤ しかし、社会への積極性が減少すると、社会認識の意義は急速に低下する。
という質のものである。ここまでのまとめを基にして、さらに考えてみよう。

2 社会の存在を信じるとは?

ここまでまとめると、次は「社会」の存在を積極的に信じるとはどのようなことなのであろうかについて考えなくてはならない。これは、社会意識はどのようにして形成されたのであろうか、という問いでもある。また、意識にとって、社会認識はどのような積極的な意味をもっているのであろうか、と言い直すことができる問いであろう。

まず、上記の①について、社会はどのように思い描かれるのであろうか。

「社会」が二次的に思い浮かばれる像であるとして、これに対して、私たちはどのようなイメージをもっているのであろうか。まず思い浮かぶのは、この言葉からは、
〇普段の生活空間を越え出ている広い範囲の世界が存在していること、
〇自分とは直接には関係しない多くの人たちがこの世には存在しているということ
が、感じ取れる。

都会の繁華街の交差点で行き交う人を眺めていると、私のまったく知らない人ばかりである。そんな時、ふっと思う。このたくさんの人たちは、何処でどのような生活をしているのであろうか。忙しく歩く多くの人たちにとって、私はまったく知らない無視しても何にも困らない存在であることに、突然気づく。私が普段の生活でぐちぐちといろんなことに思案を巡らしていても、目の前を行き交う人たちにとっては、私の心の中にしまいこんでいる雑多なことは知らないことであり、直接的には関係しないことである。人波の中で、砂粒のような人たちの流れの中でふっと立ち止まっている自分に、なんとも言えないさみしさを感じてしまう。私は、何処にいるのだろうか。ここはどこなのだ。何故、ここに立ち留まっているのか?

この眼前の砂粒のような人たちが形作っているのが、「社会」なるものらしい。そう感じる。ここに、私個人の普段の生活範囲をはるかに越え出たものが存在しているらしいことに、気づく。このぼんやりと体感する「社会」は、私にある種の強制として迫ってくるものであるようだ。私個人がその人波に逆らっても、向こう岸までたどり着くことはなかなか困難なことである。その流れに沿って行動するしかなく、私個人の行為がこのような多数の人たちにとってのある種の意味を見出すのは、なかなか難しいようだ。このように、社会とは、このような砂粒のような個々人が集まって形作っているが、その中の一個人にとっては、どうにもならない分厚い壁のような存在でもあるらしい。

だから、ここから思い浮かばれる社会像には、もう一つあるようだ。

〇一個人にとっては、分厚い壁のようなどうにもならない何か大きな有機体のごとき動きをする存在として意識されているものでもある
ということだろう。
　次は、どのような条件があれば、人は普段の生活を越え出た広い範囲を思い描き、自分とは直接には関係しない多くの人たちがこの世には存在しているということに気づくのであろうか。
条件①　現代はマスメディアの発達を条件として、「社会」像は思い描かれている。
　テレビや新聞、そして雑誌等で、遠く南米のアマゾン川流域やアフリカの砂漠にも私たちと同じような人間がいて、その地の環境に合わせて生きていることをリアルに伝えてくれる。特に、テレビは、このことをリアルタイムに感じ取らせてくれる。そのことで、グローバルな地球共同体とも言える感覚を抱くようにまでなっている。このように、情報を通した人と人との広い関係が築かれていることを前提として、社会を意識する。
条件②　社会的分業と交通の発達によって、「社会」像は思い描かれている。
　前近代のように自給自足の生活をしていては、広い範囲の「社会」の存在に気づかない。アメリカの今まで一度も会ったことのない人たちの作ったオレンジや、他の世界中の地で作られたものを食べたり使ったりしている。自分の作り出したものでない物と情報が広範囲に流通している。このようなことが、「社会」を思い描く基本的条件となっている。これは、市場での貨幣による商品交換がもたらしているものである。
　つまり、物・人・事の交換関係によって、人々は普段の生活圏を越えた広い世界があることを認識している。そして、その広い世界が私たちの毎日の生活に大きな影響を与えていることを、知るのだ。

　次は、上記の④について考えてみよう。どのような条件があれば、「社会」の存在を積極的に信じて、一人ひとりの人間にあるまとまった像(イメージ)としてそれなりの妥当性もって意識されてくるのであろうか。
　第一に、自分の周囲の人たちに対して、「同じ人間である」という意識が共有されていなくてはならないであろう。自分だけが幸せであればよくて、他の人のことなどどうでもよいという意識でいたのでは、まとまった「社会像」などとても形成されないであろう。自分と同じように喜びや悲しみの感情をもつ他者がいることを感じること、そして、他の人たちも自分と一緒に幸せになって欲しいという感情が必要となる。これなくしては、「社会」への関心がきわめて薄くなり、まとまった一つの社会像が描けないことになる。
＊市民革命後の基本的人権が確立していることを意味している。
　第二には、お互いの私的利害を基にした利害関係を軸にしながらも、このような関係の網の目を広範な人々がそれなりに意識(共有)していなくてはならない。同じ社会

内で生活しているという意識が広まっていなくてはならない。
＊マスメディアが広まって、公共的な空間の成立していることを意味する。
　第三としては、このような社会の中では各人は自分の私的な利益を最大限に配慮する権利があり、それを保障する社会的ルールが整備されていなくてはならない。
＊これは、近代国家(国民国家)の成立を意味する。
　つまり、このような社会的ルールに基づいて、人間は相互に平等な権利を保有しており、また、ルールは人々の合意によって形成されるべきものであり、その変更も可能であるという意識が広範に形成されていて、今まで一度も会ったこともない人たちも自分と同じ人間として相互承認することができるようになる。こうして、初めて、各個人のそれなりにまとまったイメージとしてもっている社会像が成立することになる。
　前近代の社会では、人々は多くの場合、直接顔を会わせることのできる共同体を生活圏として暮らしていた。このような暮らしをしていては、日々の生活圏を越え出た「社会」なるものを意識することは難しかった。また、狭い共同体の中で暮らしていては、人間が相互に平等であるという意識は成立しない。人間の歴史では、狭い関係の中で共同体内の権力関係による身分秩序をそのまま信じて生きてきた歴史が長い。これを打ち破ったのは、市場経済の発展である。そして、資本制生産様式の確立で、人と物、そして事の移動性が激しくなったためである。社会流動性が激しくなることで、「社会」なる物を意識されるようになった。そして、このような中で生きていく社会的ルールを保障するものとして、近代になって成立した「国民国家」が、その役割を果たしていることを忘れてはならない。
　また、「社会」なるものをイメージは、特に、市場経済の発展と交通と通信等の発達によって可能となったものである。そして、新聞や雑誌によって作り出された公共圏(議論しあう空間)が形成されることで、「社会」はより一層はっきりと意識されてきた。同じ社会に住む「我々」という感覚は、このような公共的な空間ができることで、共通の課題意識がはっきりされてくることで成立するものである。だから、一度も会ったことのない人たちへの関心を示すようになる。こうして、ひとまとまりの「社会意識」が、それなりの妥当性のある意識として成立する。

3　ジャガイモ栽培と社会認識-ドイツとフランスの差異-
　次は上記の②について、社会像が異なって形成されることについて考えてみたい。
　ここに書いている「社会」とは、国家とは異なるものである。しかし、日本社会では、この二つがどうしても同じことを言い表していると把握してしまいがちである。これは、日本がヨーロッパに比べて遅れて近代化を始めたために、国家行政を通して上からの近代化が図られたためにもたらされた社会意識である。
　近代における「社会」とは、西欧に誕生して全世界に広まった「社会意識」は、商品経済の発展に伴って意識されてきたものである。市場経済の発展で、それまでの前

近代の封建的な国家の枠を越えて「社会」なるものが形成されていると、諸個人に意識されてきたものである。それに対して、「国家」は政治的圧力として覆いかぶさってくるものと意識された。社会とは、市民社会という言葉のように、当時の市民＝ブルジョアジーたちが作り出してきた共同空間である。

それが、遅れて近代化を始めた諸国家では、国家行政が、官僚が近代化を上から強制的に推し進めてきた地域では、国家＝社会との意識がどうしても生じる。これが、今までの日本社会での年配者たちが強く抱く社会観ではなかろうか。

私は、もう近代化の一応の終了をみた日本で、「社会」という言葉と国家行政との違いがそろそろ多くの人たちに理解されることを期待して、市民的社会意識についてもう一度考えてみようと思っている。

そこで、近代化の先進国と後進国における社会観の相違が生じたその歴史的事実について、現代では当たり前の食料となっているジャガイモ栽培について書くことで、その違いの一端をより鮮明にしたい。

＊以下の文章は、「NHK カルチャーラジオ」テキストである『新大陸の植物が世界を変えた』(酒井伸雄)に基づいている。

インカ帝国を滅ぼしたピサロの軍隊は、略奪につぐ略奪をして金銀財宝を本国スペインにもたらした。その時ジャガイモも一緒にもたらされたとされている。しかし、この説は有力ではあるが、実ははっきりとした証拠はない。まあ、16世紀の半ばまでにはスペインに伝わり、大学や君主の庭園や薬草園で栽培されていたらしい。最初は王侯貴族の観賞用として、白くて小さな花が高く評価されていたらしい。

それが 1600 年までには、ヨーロッパ中に伝わったといわれているが、この時期までは、まだまだ食料として重視されていたわけではなさそうである。観賞用として、そして結核に対する薬用植物として広まった。イモの部分は、豚の食べ物とか、味が淡白で犬も食わないと相手にされない状態であった。これは、それまでのヨーロッパの食べ物とは大きく異なるので、人々が食べることへの抵抗感が強かったためでもあろう。聖書に書かれていない物を食べるなんて、罪深い行為とも思われていたと聞く。さらに、生のままで食べて強いアクにあたって湿疹を発症する人が絶えなかったために、食べるとハンセン病になってしまうとの恐怖感もともなっていた。

〈ドイツのジャガイモ栽培　フリードリッヒ大王〉

このような状態の中で、いち早く庶民の食卓に上がるようになったのは、当時の後進国中の後進国であったドイツのプロイセンであった。この地にジャガイモが普及することになったのは、当時のフリードリッヒ大王(1712-86 年)の政策による。フリードリッヒが即位した時は、最後の宗教戦争と言われている30年戦争(1618-48 年)の後遺症

とペストの大流行、そして天候不順による度重なる凶作で、国中が疲弊しきっていた。そこで、王は、農産物の生産力を高めない事には国力の充実はないと判断した。農業生産力を挙げない事には、30 年戦争で減ってしまった人口を増やせない。戦争が絶え間なくなされていた当時では、兵士を増やすことは、国王として絶対的な使命であった。

それまで食べることをしていなかった国民にジャガイモの価値を分からせるために、公開でジャガイモ料理の公開試食会を開催したり、自分がジャガイモ料理を食べて見せたりしている。しかし、それでもなかなか効果がないので、1756 年にジャガイモの栽培を強制する法令を出し、軍隊を派遣して栽培状況を監視までしている。

このジュガイモ栽培のおかげで、麦類の不作にもかかわらず、人口は増えていくことになった。この王が即位の時は八万人であったプロイセンの軍隊の兵力が、30 年後の 1786 年には二十二万人までなっていた。

ジャガイモ以外の要因も当然あるが、この作物のおかげで兵員は整い、プロイセンは他の王朝との戦争に勝つことができて領土がどんどん増えていった。このように言ってもよいくらい、効果があった。「七年戦争(1756-63 年)」にプロイセンは勝利することで、ヨーロッパの列強の一員となり、やがて、1871 年にプロイセン国王ヴイルヘルム一世がドイツ皇帝に即位することにまでなった。

この地の人々にとって社会とは、国家行政の管理下にあるものであって、国家＝社会となっており、前近代からの意識そのものである。

このような社会意識の人々に、激烈な国家間競争に打ち勝つために上からの近代化の政策として、国家への忠誠を叩き込む精神教育がドイツではなされた。このような社会意識は、後のナチス・ドイツの支配体制と通じているものがあるであろう。

〈フランスのジャガイモ栽培〉

フランスは、今もヨーロッパ最大の農業国である。ドイツに比べると温暖であり、緑豊かな大地が広がっている。この豊かさのために、農民は麦類栽培に熱心で、ジャガイモ栽培はなかなか普及しなかった。

このようなフランスにジャガイモ栽培を広めたのは、アントワーヌ・パルマンティエ(1738-1813 年)である。彼はプロイセン対ロシア・フランス・オーストリアで戦われた「七年戦争」でプロイセンの捕虜として 3 年間過ごした。捕虜収容所の食事は、ジャガイモの入ったスープであった。具が多くてスープだけでも、一度の食事として十分な量があった。このような食生活で、彼はジャガイモが食物として優れていることに気が付く。

パルマンティエは帰国後、ジャガイモ栽培の普及に力を注ぐことになる。国王ルイ十六世の援助を得て、1787 年にパリ郊外に六万坪もの土地でジャガイモの試験栽培を始めた。

彼はこの農場を柵で囲み、これは王侯貴族が食べるものであるから盗んだものは

厳罰にするという看板を掲げて、昼間は見張りの兵隊まで置いていた。しかし、夜は監視の兵隊を引き揚げさせた。これは、人々に興味関心を高めて、こっそりと盗み食いさせることで普及させようとした手段であった。王様の食べ物ということに興味をもつた周辺の人たちは、パルマンティエのもくろみ通り、夜な夜な盗み取りして食べたりみずから栽培したりした。この作戦はうまくいき、なんと 10 年程度でフランス全土の農民にジャガイモ栽培が普及して、人々の食糧事情は大幅に改善された。このようにして、ジャガイモは人々の食料となり、商品作物として取引される作物となった。
＊彼も公開試食会等の上からの普及活動をしているが、権力を通しての強制はしていない。

このように、農民の所有欲や栽培意欲をうまく利用したことに、ドイツとの大きな差異がある。これが 1789 年のフランス大革命が起こる要因としてまで読み込むことは間違っていようが、それでも、プロイセンとは大いに異なっている。まず、個々人が商品の所有者として登場して、その多くの人たちによって社会が意識され形成されたのが、フランスという地の社会観であろう。
当時の第三身分のフランスの農民たちは、貧しかった。王侯貴族とカトリックの聖職者たちに苦しめられていた。でも、プロイセンに比べると、革命を起こすことのできる貧しさであった。今のドイツの東部であるプロイセンの農民たちは、どんなに貧しくても、どんなにひどいことをされても、当時の封建諸侯から離れて生きていくことができない状態であった。農奴であった。プロイセンはナポレオンに二度負けて、ベルリンに入城までされて、やつと農奴解放等の近代化に着手した。それも、上からの政策として。

4 フッサールの現象学、「本質観取」について
ここまで社会意識について書いているのに、社会科学的用語を使って思考をすることをせずに、自分の心に問うことばかりしてきた。社会的な思考しているのに社会学の知識を記載していないのは、不思議なことであると思われる人がいることであろう。私は、ここでは「社会意識」についての再考・意識の高まりの推移・歴史を書いてきたのではない。多くの本に書かれているような近代社会の歴史を再確認しているのではない。そのために、このような方法をしている。
この思考の仕方は、フッサールの現象学における「本質観取」の方法を参考にしている。そこで、これからこの「本質観取」について少し記載することを通して、「社会」なるものについてさらに思考を試みたいと思う。
フッサールは、自分のしている現象学と言われている思考を「超越論的観念論」と名付けているくらい、カントの影響を受けている。人間の持っている主観についての思考から普遍的なものを取りだそうとした哲学思想家カントの方法を徹底化させようとしたのが、フッサール哲学である。

＊ここでいう普遍とは、絶対的な普遍的な本質?なんて難しく考えなくて、多くの人たちに共通して認識されるもの、程度のものである。言い換えると、普遍性とは共通性という程度の意味であって、きちんと定義して使用するものではない。

私たちは日々、さまざまなことを経験している。そして、その経験はその時その時、それぞれ別のこととして共通性などまったくないかのごとく、また他の人との共通性もないかのごとく現れ出る。同時に経験しても、受け止め方は人それぞれである。でも、この世の出来事であるから、私たちの存在しているこの空間と時間にあるものとして現れている。このことは、共通している。それともう一つ、言葉の中で経験していることを、忘れてはならない。経験したことを言葉として、他の人との会話等を通じて、認識している。経験ということは、人それぞれであり、その時その時であるが、空間・時間、そして言葉を介した人々の中でなされるものである。

フッサールは、次のように書いている。＊意訳して記載

「日々現れ出る経験のもつ偶然性は限定されているが、ある必然性ともいえるものと関係している」

つまり、偶然性は必然性と一緒に考えなくてはならない、と言っている。偶然的なものは、それにもかかわらず、必ず、普遍性をもっていて、それを言葉として取り出すことができる、と言うのだ。この本質を言葉として記述してはっきりさせることが、フッサールのいう「本質観取」なのだ。これは、カントの発想をより明確にするためにしているといえるであろう。

彼は、主観と客観の一致をめざして認識活動を行うなんていう真理観をしていない。だれも、本当のものとか、誰もが認める客観的なことが分かるなんて言う立場には立たない。これは、カントと共通している。だが、カントは私たち人間は普遍的なものを形成する認識装置をもっているとしたが、それに対して、私たちの日々の生活で行っている認識活動は、そもそも初めから普遍的(時間と空間、そして言葉の中で)なものを含んでいるのだ、とフッサールは言っている。

普遍的なものを、言葉にしてみるというのが、本質観取である。でも、この普遍とは、絶対的なものではない。誰にも共通なものとして現れ出ると思わざるを得ないというものである。だから、私たちは、一人一人の主観に閉じこもっていることを前提にしているが、でも、その個別の主観を越えて共通性を求めるという志向性があることも述べているのだ。より多くの人が納得でき得るような言葉を、共通認識を作り出すのが人間の社会関係なのだと述べているのだ。つまりは、「私」個人に閉じこもるのではなくして、他の人と関わることで共通した世界を相互に認識(間主観性、共同主観)することができるという意味であろう。

だから、私個人にとっての普遍性は、他の人の中で試され鍛えられなくてはならないのだ。現れ出る事物は、私たちのその時の興味関心等によってさまざまな様相のも

のとして現れ出てくるのだが、その実、その中には普遍性が宿っているのだ。
私の今までしてきた「社会」についての思考は、このようにフッサール現象学における「本質観取」の考えにそったものである。「社会」について、私がこうであろうと思っている社会観、社会認識が成立するその確信の条件を、言葉として取り出しているものである。
社会科学的思考に慣れ親しんでいる人にとって、何故このような迂回した思考をするのかという思いを抱いたと思われるが、このような思考を経ることで、私にとっての「社会認識」の視点を鮮明にすることができ、私の固く信じている社会認識の根拠の条件を明瞭にできると思われる。ここから、始まるのだ。

5 二つの社会像

次は、社会への態度を「積極性」と「消極性」の二つに分けて、その社会認識の在り方を類型化して対比して考えたい。こうすることで、「社会」なるものがより一層はっきりするし、何故抜き差しならない社会観の対立が起こるかもわかってくると思われる。

〈積極的に主体性を発揮しようとする社会像〉

市場での貨幣による物の交換が盛んになるにつれて、人の移動と情報等も動き出す。社会的流動性が増すこととなる。このような状況で意識されるのは、「積極的に主体性を発揮しようとする社会像」である。
これは、社会の在り方は、社会のルールは、自分たちが協同で作り上げていくものだとする社会意識であった。社会の諸制度は自分たちで制定したものであるから、不都合なところはいつでも変更できるとの意識である。この考えは、近代の初めに王政を倒した市民革命の理論であった。この考えは、「社会契約説」と呼ばれている。この考えでは、社会制度やルールについての意識が、前近代とは根底的な転換がなされている。社会の秩序は神から与えられたものではなくして、対等な人間が創り出したものであるとの意味合いをもっている。
こうなると、社会秩序の正当性を神に求めることは、できない。時代と場所によっては、紆余曲折を経ながらも、社会システムの逆戻りは、もうありえないこととなる。
このように意識された社会の中の諸個人は、私的な所有物を持ち、私的な商品を携えて市場に登場する。このように登場してくる諸個人は、社会や国家に先立って独立自存しており、自立(律)心をもって行動する人たちとして意識されていた。だから、社会は、このような人たちによって形成される二次的なものである。まず存在するのは、自立している誇り高き諸個人なのである。このような個人が寄り集まって建設するのが、「社会」であって、その在り方は諸個人の意識に基づいて変更していくことが可能であるというのが、「積極的に主体性を発揮しようとする社会像」である。
このような社会意識が、市民革命を成し遂げたところでははっきりと形作られた歴

史がある。このような社会意識について、まとめてみると、

① このような社会意識は、社会環境をよりよくコントロールしようとする「積極的な市民意識を抱いた我々意識」を前提としたものである。

② このような社会意識は、ある一定の問題意識にそって見出されてきたものであって、日々生きている社会のシステムをそのままきちんと写し取ったものではない。

③ だから、科学的と言われる社会科学的認識も、ある経験的なデーターに基づいて推論されたものである。社会的な経験的な法則を見出した人たちもその社会内に住んでいるから、その出来事を外から観察しているのではないから、見出した法則や原則は、あくまでも傾向的法則である。

④ そして、問題意識や価値観と同じように、「社会認識」は人々の間で論じることのできるものであるから、その社会科学的研究成果は、その社会内の他の人たちによってその妥当性を吟味されなければならないものである。だから、得られた社会認識は、実践している現場としての私たちの日々の「意識」に視点を当てて、そこに向かって問いかけていくことによってしか、その社会認識の根拠や正当性をはっきりさせることができないものである。絶対的な客観性や真理性などありえないから、得られた社会認識は人々の間で自由に価値判断をしたり討議することができるものなのだ。

⑤ そうなると、その社会には近代になって形成された社会認識をもっている人が多数いて、その社会認識の妥当性が吟味できる環境が必要となる。このような条件のないところでは、そのような社会認識そのものがあまり意味をなさないことになる。つまり、多くの人たちが「積極的に主体性を発揮しようとする社会像」を抱いていることが、「社会認識」にとって最も大切なことになる。

★これは、歴史的には、「社会契約説」に基づく社会像であると言えよう。歴史的には、このような社会観は西ヨーロッパにおいて最も早く近代特有の社会意識として形成された。それまでの共同体が解体・弱化され地縁や血縁とは区別された、自立(律)的な諸個人の営む経済活動によって形作られる自生的な社会秩序としての「市民社会」が貨幣経済の進展とともにはっきりと意識されるようになった。そして、それに圧力として覆いかぶさる「国家」との違いもはっきりと意識された。

このように、近代とは、人々の自主的な経済諸活動(市場経済の発展)によって、この「社会」なるものの存在が確認され、社会意識が論じられてきた時代である。

このように、「積極的に主体性を発揮しようとする社会像」は、確かに歴史的に形成されたものではあるが、一つの説ではあるが、この社会意識を前提としないと、かつてのように共同体の中に埋没していては、「社会認識」は人々の間で論じることができなくなる。これは歴史的に形成されたものではあるが、ある意味で普遍的意識であると言えよう。

社会科学的研究成果では、絶対的な客観性や真理性などありえないから、得られ

た社会認識は人々の間で自由に価値判断をしたり討議することができなくてはならない。その時、この前提となるのは、このような「積極的な社会意識」である。だから、この社会意識を普遍的意識として、このことを大前提として論じなくてはならない。

市場経済は、大切な役目(「文明化作用」)を果たしているのだ。これを、忘れてはならない。

〈動かしがたい強固な枠組みとしての社会像〉

近代化が国家行政の政策として、人々の自主性を押しつぶしながら社会システムの変更がなされたところでは、また違った社会像が意識された。近代化が西ヨーロッパに比べて遅れて始まったところでは、国家行政による近代化が権力によって強引になされたので、そこで暮らしていた人たちが抱いた社会像は、「積極的に主体性を発揮しようとする社会像」ではなかった。このような地域や国家内では、人々にとって「社会」とは「動かしがたい強固な枠組みとしての社会像」であった。

① 「社会」には、決まっている制度とルールがある。違反したら罰せられる。このような中で暮らしていると、「社会」とは私たちが生きていく上でのある種の客観的な様相をした動かすことのできない仕組みとして、圧力として意識されるものである。その社会に住んでいる者にとっては、ただただ耐えるものとしての意識となる。

② このような意識が蔓延している社会では、問題意識をもって分析し思考して得られた社会認識は、多くの人たちで論じられることが難しくなる。

③ そのために、社会科学に基づく「社会認識」が人々の中に広まらないし、また深い研究が意味をなさないことになりかねない。いやいや、熱心な研究動機さえ、生じにくい社会環境にある、といえよう。

★このような社会像は、前近代の国家観・社会観であった「社会有機体説」に基づくものである。

6　日本社会の問題点

ここまでまとめると、日本社会の問題点がはっきりした。日本社会では、明治以来多くの人々が思い描いた社会像は、「動かしがたい強固な枠組みとしての社会像」であった。この社会意識が、今もなお一定数の人々の中にある。政治は、そして社会的なことは、お役所の役人が行政を通して行われるものであって、私たちではどうにもならないものとしている意識が今もある。

学問の世界の人たちや、欧米社会についての一応の体験や知識のある人たちにとっての社会とは「社会契約説」による社会像のことであり、その他の人たちにとっての社会とは「社会有機体説」による社会像を思い浮かべていた。この二つが、大きくかい離したままであった。そのために、社会科学に基づく「社会認識」が人々の中に広まらないし、また深い研究が意味をなさない事態になっていた。

このような文章を書いている私は、そして私たちが社会問題や地球の環境問題を論じている時は、そのことを共同の問題として対処しようとする「積極的に主体性を発揮しようとする社会像」を抱いていることになる。その社会像はこの社会を客観的に写し取ったものではないので、起こっている社会問題の原因とその解決策を探りだそうとするのだから、私たちの住んでいるこの社会を改善しようとする熱い意識に動機づけられたものである。

でも、私の日々接している多くの人たちからは、このような熱い意識は感じ取れないことが多い。日本では、この「社会」なるものが意識されたのは、ヨーロッパに比べて遅かった。そのため、「社会」とは、行政、つまりお上意識のお役所を通して、国家という仕組みと通じている感覚が強かった。

しかし、戦後の経済の高度成長を機会に社会は、一気に流動化した。それまでの地縁・血縁による地域共同体からの離脱をする人たちが増えた。人々が、それまでと縁のない土地で暮らす人たちが多数になった。そして、田舎でも、村落共同体の規制力は、年々弱まってきた。戦後の高度成長も経て、近代化はもうほぼ終了していると思われるのに、このような意識が蔓延しているのは、何故なのか。次はこのことを問いとして、さらに考えてみよう。

私は、『とんでもないことが!』(図書新聞社発行)で、ヘーゲルの国家観・社会観を徹底的に批判した。美しいことを夢見て醜いことをした典型的な事例として批判した。社会有機体説に基づく国家観や社会観を、国家なるものに陶酔することを素晴らしいとする考えを批判した。しかし、現実の目の前の人たちの行動を理解するには、ここまでの「社会意識」について思索では、まだまだ解明できていないと思われる。

まず言えることは、「社会契約説」も、「社会有機体説」も、一つの説であるということだ。どちらの説も、社会の中の諸個人が当時の社会に関わる時に、それなりの大きな働きをしたことは間違いない。でも、どちらも、現実の社会を説明するには、不十分である。そうでなかったら、19 世紀に社会学なるものが設立するはずがない。

社会総体を俯瞰すると、「社会」なるものは、諸個人の意思を無視してそれなりの独自の動きをしたからだ。社会について思考するには、この視点がどうしても必要となる。科学や理性の発展で人は迷信から抜け出せると、信じられていた時代があった。人間のもつ理性なるものに全幅の信頼を寄せていた時代があった。しかし、そうはならなかった。人は、いろんなことをする。してはならない悪行を、そして愚かなことをする。それも、たくさんの人が、してきた。そんな時に、思う。人は、何故そのようなことをするのかと。この時、このことの背後に、「何が人にそのようにさせているのか」という社会的動機を読み解いていく姿勢が必要となる。この視点から、社会科学は始まった。

絶望か、希望か?---社会運動の可能性---

1　私たちは今、どのような集団性の中にいるのか?

ここで、問いを少し変えてみよう。私たちは、今、どのような集団性の中にいるのであろうか?ということについて、人々の動きをもう少し細かく見てみよう。

①〈世間への視線〉

私は、『とんでもないことが!』(図書新聞社)には、小さな祠の再興の問題を書いている。この問題が、この本を書き上げる最初のきっかけであった。最初は、このような小さなことと思われていたことから、そのことの背後を考えていくと、どんどんと大きなことにまで関係していることが、はっきりした。ちょっと考えると、このような宗教的な問題を自治会で強要することの間違いを、またこのようなことは時代錯誤がはなはだしいことに気付くと思われるのに、そうではない実態を記している。

私が自治会集会で宗教の強制に反対しているのに、それに賛同する声などなかった。迷惑そうな顔を、露骨にする人たちもいた。でも、彼らも実は、小さな祠の再興に積極的に賛成というのではない。そのことは、祠の再興に積極的に賛成している声もなかったことから、分かる。祠の再興を言い出した人たちを除いて、他の多くの人たちは何にも言わないのだ。つまり、周囲の人たちの視線を気にしているだけなのだ。地域の有力者たちとの、祠の再興を言い出した人たちとの対立になることを、避けたいとの思いが優先しているのだ。だから、もめない方法を模索する。本当はこのようなことはおかしいとの意識をもっているのに、祠を再興して祭りを自治会として行うことはしたくないと思っているのに、抵抗のランクを下げて「どのくらい寄付したらよいのか?」なんて言い出すこととなる。

このような人たちも、昔とは異なり他の地域に働きに行ったりしているから、この地以外の職場や別の地域の様子もよく知っている。だから、宗教の強制をすることは間違っていることは、知り抜いている。でも、意見を言わないのだ。

彼らの判断基準は、周囲の人たちの視線である。この視線は、「世間」という言葉で言い表せる社会関係のことである。世間には、いろいろある。自治会の世間、職場の世間等、私たちの関係するいろんな場面に、この世間が成立している。学生やフリーター等という社会的流動性の高い人たちも、はなはだ参加意識の薄い「世間」なるものを意識している。

「世間」とは、「社会」と比べて、狭くてある決まった中での人間関係を規制しているものである。この世間では半分強制関係があったり、半分相互扶助としての機能もそれなりにある。各世間には、このように人々を規制する規範があり、それに反すると排除の論理が働く。この「世間」という意識を抱いている場合の人間関係は、「動かしがたい強固な枠組み」としてあるようだ。

何か他の人たちと違ったことをしたりすると、どのように言われるかもしれないとい

う視線におびえているようにさえ感じ取れる言動をする。だから、その世間内では、それまでの慣例が、いつまでも改革されない。時代に即していないことでも、今まで通りの内容と手順で事が運ばれる。周りの人の言動に合わせて行動する方が無難である、との意識にガチガチにとらわれていることが多い。

自治会の「世間」では、権力的身分秩序のようなものは強く作用していないから、「動かない強固な枠組み」として意識されても、社会有機体説の社会像そのものではないのに、変更していくことは、なかなかできない。

では、この「世間」なるものにとらわれた意識から脱却するには、どうしたらよいであろうか。それは、はっきりしている。社会的流動性が今以上に激しくなることが、最も有効である。職場を、仕事が変わることが容易な社会になると、この「世間」なるものの規制力は、小さくなる。転職が当然のこととして見なされると、転職することがそれなりに素晴らしいことであると見なされると、この「世間」の規制力は、一気に小さくなる。そして、さらに転職に伴って居住地が変わることが今以上に当たり前になると、この「世間」にとらわれる意識は、もっと小さくなるであろう。

私は香川県の田舎に住んでいる。自治会の加入者の数は減ることはあっても、増えていない。昔からの家ばかりである。そのために、人間関係が固まってしまっていることが多い。それも一個人としての関係ではなくして、家対家の関係として、・・・。他地からの転入者がほとんどいない。

職場の「世間」では権力的身分秩序のようなものがあるので、一度この世間が形作られると、これを変えていくとはとても難しいこととなる。ただ、ただ、従うだけの集団性となる。私は文部科学省の天領と言われていた香川県の田舎の公立学校の教師をしていましたので、この職場の「世間」の規制力がものすごく強かった。そして、転職の自由度、転勤の自由度も、ものすごく低かった。

また、企業においても、新入社員や若手社員に対する説教の決まり文句に、「そんなんじゃ社会で通用しないぞ」と言う人がいる。この場合の「社会」という言葉は、実際の社会を意味しない。せいぜい「自分の会社」であり、大抵の場合は「自分の部署」である。「そんなんじゃうちの会社では通用しないぞ」とか、「そんなんじゃうちの部署では通用しないぞ」と言うべきことを、「そんなんじゃ社会で通用しないぞ」と盛って言っていることがほとんどだろう。たまたま、その組織の慣習や、やり方が合っていなかったというだけのことに対して、社会生活不適合者のような烙印を押す言葉であろう。そもそも、「社会で通用しない」というのは曖昧である。よくわからない精神論に落ち着いてしまうこととなる。これは、会社員生活が長くなり、その中にどっぷりと浸ってしまっているので、「自分の会社」や「自分の部署」が、会社という「世間」が「社会」になってしまっている、と言えよう。

そこで、このように職場でも、「社会的流動性が今以上に高まることが最も有効である、と考えられる。職場を、仕事が変わることが当然のこととして容易な社会になると、

この「世間」なるものの規制力は、小さくなる。転勤することが当然のこととして見なされると、この「世間」の規制力は一期に小さくなる。居住地が変わることが今以上に当たり前になると、この「世間」にとらわれる意識はもっと小さくなるであろう、と思われる。しかし、未来が、この社会的流動性少なくなるような「縮小社会」では、この「世間」なるものにとらわれる意識がもっと強固になる可能性も考えられる。だから、私たちの未来構想としての「縮小社会」では、このことについての十分な配慮が必要となる。何を縮小して、何をのびやかに開花させていくのかを、そしてどのような社会システムになるのかをもっと検討しなくてはならない。

＊追記　しかし、この「世間なるもの」に関わっているすべての人が自立した個人として行動することは、難しいと思われる。このことを覚悟の上で、自治会等と関わることが必要だと思われる。「世間」に引っ張られる事からの完全な自由は、ないであろう。でも、「世間」の相互扶助の働きと、規制力(排除の論理)が弱まることは、大切なことだ。小数派も、息をすることができるのだから。一定数の人たちがそのことに疑問を感じ取り異議申し立てをできるようになれば、自治会や職場の在り方は、大きく変化すると思われる。

② <「相互不干渉」という自由---西研(和光大学)>

私たちは日常生活において、他の人たちや集団的なもの自体を心地よく自由に活動ができて楽しいものとするためのルール感覚を身に着けることができていないためではなかろうか?と思える。私たちは、集まること、団結すること、そのこと自体に懐疑的であり、時には嫌悪感さえもつことがある。集まると、また、したくはないことを強要される。皆のために、子どもたちのために、〇〇をしましょう、なんて言葉優しく語られるが、その実は半強制なのだ、と意識する。このように、集団とは、ガマンと抑圧感を感じるだけのものとなっている。

和光大学の西研さんは、ホームページの「きょういくをテツガクする」で、現代人の集団性について次のように書いている。

> 戦後の経済の高度成長は、かつての他者関係の保ち方を解体した。しかし、それに代わるものを、私たちは獲得していない。昔の人間関係として描かれるのは、周囲の空気を微妙に察知して、そこに自分を同調させていく仕方である。農村共同体のこうした気遣いの煩わしさから、我々は解放されようとしてきた。他者から邪魔されずに音楽を聴いたりすることができるようになった。自分だけの時間と空間を求めた私たちは、昔の人たちから見て、大なり小なり、オタクになったと言える。
>
> 私たちは、他者関係や集団性自体を心地よく自由で楽しいものにしていくた

めのルール感覚を身につけていない。他者や集団は相変わらず同調を強要してくるものであり、疲れるものであって、一人になった時初めてほっとできるという人が多い。この傾向は、近年ますます激しくなっている。少子化が進み、一人遊びのアイテムが十分に用意され、地域での開放感あふれた子ども社会も解体してしまった現代では、さらに人との関係能力を身につける機会が減ってきている。

相互に意見を言い合って、集団をもっと楽しくよい場所にしたり、集団を作り上げていく悦び感じ取ることができないだけでなくて、想像もされないとなると、集団はただ疲れるだけの場所になってしまう。これはものすごい問題であり、不幸なことである。

このことは、田舎暮らしの私にも、納得できる言葉である。現代日本では、このような集団性の中で生活しているようだ。だから、自分に直接に関わらない事には、「積極的に主体性を発揮しよう」とはしないのだろう。こう考えると、先の小さな祠の再興とその祭りについてのことも、私以外の他の人たちの言動にそれなりに納得できる。自分に直接さしせまった関係にないことには、関わりたくないのだ。でも、これは、ものすごく困った問題状況である。

私も、一つの事例を示したい。

ある時、素晴らしいアイディアをもっている人がいたので、そのことを称賛して一緒に実践しませんかと話しかけた。最初はその人も強く賛同していたのだが、肝心な大切な話になってくると、いつの間にやらその場から逃げようとするのだ。会話されたことを積み重ねて次の段階に進もうとしないのだ。すぐ、あきらめる。話がねじれてくる。自分を安全圏に置いていたいとの意向が感じ取れるようになる。話していてその人の意見が集団の中でそのままでは通らないようになると、

「もう、いいや。戯言でした。忘れてください。」

なんて言い出す。これは、私や一緒に会話していた人たちのことが嫌いで言っているのではないことも感じ取れる。私たちを避けたいわけではない。

自分が傷つくかもしれないことを、極度に嫌うのだ。これは、人との親密な関係になることを、避けようとしている、と理解できる。他の人たちとの距離感の取り方がなかなかうまくできなくて、苦労しているように、思われる。

自分を安全圏に置いて、うまく立ち回る人は、いつの時代にもいた。しかし以前は、そのような人たちは社会理論を語ったりすることはあまりない。今は立派な理論を語る人が、このような態度をするのだ。メール上では立派なことを語っても、直接的な人間関係になると、ものすごく避けようとする人がいる。これは、他の人たちとの親密さと、そしてその人との距離感の微妙なバランスをとることが、難しくて苦労しているためであろう。

このような人たちも、心の奥底では、人間関係を楽しくして過ごすことを求めていると思われる。表面ではシラケた言葉をつかいつつも、その言葉の下では、多くの人たちと連帯して自己実現ができる社会を求めているのだが、「積極的な社会認識」をもとうとしているのだが、自らは具体的な行動をしようとしない。彼らは、多くの人たちと語らい、そして一緒に何かをしようとする構えが、なかなか感じ取れない。そのくせ、いや、だからかもしれないが、一発逆転の、英雄を求める気持ちが強い。

③ <「他人指向型」の社会心理---リースマン>

次は、リースマンの説を取り上げてみよう。

＊デイヴィッド・リースマン（ 1909-2002 年）アメリカの社会学者である。代表的な著作『孤独な群衆』において、現代社会に支配的な社会的性格を「他人指向型」と規定した。それを、「伝統指向型」「内部指向型」との対比をして論じている。

現代社会において多数派となっている「他人指向型」とは、一定のはっきりとした生活規範をもたない、他の人たちによって承認されたいという欲望に突き動かされて日々の行動をしている人たちの様子を表す言葉である。ここでの「他人」とは、それぞれが気にしている想像上の人たちのことであり、この類型は擬似的な出来事やメディアに追い立てられている、主体性のはっきりしていない人たちがたくさん出現している現代社会の状況を言い表すものである。これは、物の生産より情報の生産が重視される社会になると、より一層激しくなる現象である。この「他人指向型」の言葉が意味している人間類型を短くまとめると、次のようになる。

他の人からどのように思われるかということを中心に考えて行動するのに、現実の他の人たちへの具体的な配慮が薄く、強い自意識があるのに、個々人の内面はまったく空虚である、と。簡単に言うと、マスメデイアから流れ出る情報に振り回されている人たちの意識状況を指している言葉である。

＊「他者指向型」と「伝統指向型」「内部指向型」との社会的性格の対比については、堀　啓造（香川大学）氏が簡単にまとめているので、それを利用したい。引用は、リースマンの『群衆の顔』（國弘正雄・久能昭訳）サイマル出版会　1952/1968)よりしている。これは、長文の『孤独な群衆』に比べてコンパクトにまとめられているので、分かりやすい。詳しくは、堀　啓造氏のホームページを参照ください。

《伝統指向型》＊<u>下線は、青野＊**太字**は、堀氏による。</u>

〇伝統指向の性格に依存している型の社会では、個人生活の変動は極めて激しく、破局的ですらあるかもしれないが、社会全体の変化は微々たるものである。この社会の**同調性**は、個人の生まれつきの性別と身分に由来する特定の社会的役割に限定されているが、若い者に、伝統に対する自動的ともいえるほどの服従を教え込むこと

によって支えられている。**伝統に対する服従**は、それに伴う報酬とともに幼児においては、その周囲にいる一族の人たちによって、また、おとなになるにつれて、それぞれの性別集団によって教えられることが多い。
〇こうして、人は他人からほめたたえられるような、難しい、いろいろな技術を身につけるとともに、その社会のある規範を破った際に、自分の身にふりかかる辱めを避ける知恵をも学びとるのである。こういう社会は、その始原的形態のままでは、今日のアメリカにはほとんど存在しない。
《内部指向型》
〇時が移るにつれて、伝統指向の社会は「たえず強制された慣習への服従」ということよりも、むしろ幼年時代に、両親その他、おとなの権威によって「内面化された規範への服従」に支えられた、新しい型の同調性へと変化していった。指向にかかわるこの本質的変化は、西ヨーロッパやその属領地で、歴史的に新しい社会的役割が生まれてきたことの原因ともなり、結果ともなった。その役割とは、それまでのように伝統的慣習(mores)に硬軟いずれにせよ注意を払うだけでは、とても子弟に対する十分な準備にはなりかねるようなたぐいの、全く新しい役割であった。そこで始めて、大家族の権威ではなく**独自の権威をもった親が出現**し、その子弟に、拡大していく社会が期待するどんな目標をも必ず成し遂げるという固い意志を、植え付けるにいたったのである。
〇内部指向型は、仕事、自己、余暇、子供、歴史などに対する姿勢によって説明することができる。だからといってこれらの姿勢には、明確に、すぐ単独で取り出せる基準は一つもない。だが、こういうことはいえるのではないか。内部指向型という概念の中心は、その是非はともかく、**個人の全生活が、ごく一般化された目標―たとえば富、名誉、善、成功―によって導かれている**ということである。このことは、両親やその他の影響力のあるおとなたちと同一視し、彼らを模範とすることにより、早くから植え付けられたのである。人は、この目的の中で、悩みもすれば、目的を成し遂げるために失敗もしながら、とにかく苦心惨憺して努力するものなのである。
〇こうした社会では、**人生とは、目的を指向するものであり、その方向を定めるものは内なる声である**ということを疑うものは一人もいない。比喩的にいえば、このような人は**ジャイロスコープ(羅針盤)**で操作されている人に例えられよう。そしてそのジャイロスコープは成人によって与えられたものである。そして、青年が人生を航海するとき、職業のうえからも、社会的にも、また彼が遠く代々住み慣れた故郷を離れる場合には地理的にも、青年を安定させるのはこのジャイロスコープなのである。
《他人指向型》
〇すでに指摘したように、内部指向型の人は急速な社会変動にうまく対処することができるのみならず、その変動を、個人的な目的の達成のために利用することを心得ている。しかし、その**変動が急激すぎる場合**には、内部指向型の人の方が他人指向型

の人よりも、弾力性に乏しいといえる。というのは、他人指向型の人がもつ同調性は、成人の権威を受け入れることよりは、むしろ同時代の人たちが抱く期待に敏感に反応するからである。他人指向型の人間は、ジャイロスコープ（羅針盤）で舵をとりながら生涯の目的に向かって進む代わりに**レーダー**によって捉えられた、**手近にある目標（それは常に動揺し、変化するものであるが）に従う**のが常である。このレーダーも同じく幼年期に据え付けられたものであるが、両親や他のおとなたちは、いつでも周囲の人々に調子を合わせ、彼に対する親やおとなたちの反応と親とおとなたちに対する自分の反応をたえずにらみ合わせていくようにと教え込むのである。

〇こういう他人指向型が増え、それに伴って他人に対する敏感さが増大したのは、**現代産業社会の広範囲かつ加速度的な社会構造の変化**の結果でもあり、また原因でもあった。その変化とは、「新」中産階級の増大、生産よりも消費に対する関心の増大、子供に対する親の自信と監護力の弱体化、など列挙すれば際限がない。この場合にも、仕事、消費、性、政治、そして自己など、生活の主要な側面すべてに対する新しいさまざまの態度がみられ、性格構造と社会構造の変化を反映し確認している。かくして対人関係の世界は、人間劇の舞台装置としての物質的自然界と超自然界とを、我々の視界から見えなくしている。

〇他人指向は、ある社会が衣食住など生存に不可欠な問題はもとより、大規模な産業組織と生産の問題すらがほとんど解決され、少数の有閑階級と広範なレジャー大衆とが、それ以外のことがらに関心を抱く余裕を与えられるようになってはじめてその姿をみせる。このような社会では、いつまでも勤倹（仕事にはげみ、また、倹約につとめること。勤勉で倹約なこと。）の精神と欠乏恐怖観念とにとらわれ、禁欲主義的なピューリタニズムを頑固に守るような消費者は、その存在が否定されるのである。

〇子供は自分自身のおかれた位置と自分自身についての評価を自分の力によってではなく、自分のつきあっている仲間たちから与えられているのだ。すなわち、まず学校のクラスメートや先生たちから、さらに仲間たちやそして成長した後には同僚や上役たちから。だが自分のつき合っている仲間たちそれじしんが正しいという保証はどこにもない。そこで、かれはマス・メディアのなかに散りばめられているさまざまな集団を次から次へと気まぐれに歩いてゆくことになる。

〇そこでは**他人から認められるということ**が、その内容と一切かかわりなしに、ほとんど**唯一絶対な善と同義**になってくる。すなわち自分が認められたということは、自分がいいことをしたということに他ならないのだ。

ここに書かれていることは、現代社会の社会的心理を言い表したものとして、充分納得できることが書かれている。

明治以降の日本は、もともと「他人指向型」の人たちが多かった。「内部指向型」の個人など、たくさん出現していない。遅れて近代化を図った人たちである当時のエリー

トたちのエートスとも言えるものは、勤勉な学習と労働をもたらしたものは、「内部指向型」の代わりをしたのは、「他人指向型」の「立身出世主義」の世界観であった。これは、遅れて近代化が図られたところに現れ出る特有のものである。
　しかし、それは、80 年代からの豊かな社会の到来で、一気にくずれだした。後発近代社会」特有の「立身出世主義」の世界観の代わりに、「他人指向型」傾向が世界でも最もはっきりと現れてきた。「内部指向型」を経由していないために、この傾向はより一層激しく現れ出ている。

　我々を取り囲んでいるこのような集団性の問題の根は、深い。この根について考え直すために、①から③までの説を簡単にまとめたが、ここに書かれていることは、どれも簡単に解決のできることではない。
●西氏の言葉をその裏から読み解くと、私たちの集団性が、従来からのまとわりつくような逃れられない人間関係から、「相互不干渉の自由」を獲得することができる段階になっている、といえるのではなかろうか。そうであるならば、次の段階へと、私たちが他の人たちや集団的なもの自体を心地よく自由に活動ができて楽しいものとするためのルール感覚を身に着けることができ得るようになる可能性は、あると思える。適切な条件や社会環境が整備されたら、・・・。
●リースマンは、『孤独な群衆』で、“工業化に成功し、豊かさと利便さに浸った都市生活を享受するアメリカ人の想像力の枯渇と砂をかむようなむなしさ、そして資源と時間の浪費、偽りの人格化、欲求不満と阻害といった特徴を持つ”と表現して、現代社会の問題に警告をしたが、絶望しているわけではない。他者と社会への関係性は、その時代の諸条件や社会環境によって大きく変化するものだから。
　「世間」という規範にとらわれている意識、「相互不干渉」という自由、そして、「他人指向型」の社会心理をまとめてきたが、これだけでは、私たちがどっぷりとつかっているこの現代人のもっている集団性に、まだまだ迫れていないと思われる。

④ ＜ネット社会を生きる---社会への孤独な窓--->
　そこで、次は現代を最も象徴しているネット社会について、簡単にまとめてみたい。インターネットが当たり前のこととして意識されて、実はまだ 10 年程度である。それなのに、もう長年なされているかのごとく意識されている。まだ一度も会ったことのない人と、情報の交換をしたり、意見を闘わす。さらに、知りたい情報は、ネットで調べる。旅の予約も、ネットでする。時刻表も、ネットで検索する。本や辞典を開くことがない。食べたい料理は、その場でネットを見ながら作る。
　そのためか、新聞や雑誌が売れなくなった。たくさんの本が次々に出版されているのだが、多くは売れていない。「広辞苑」や「字源」などの分厚い本は、必要なくなったとさえ思える。分からない言葉があっても、読めない書けない漢字があっても、「字源」

を開くことなどない。パソコンを立ち上げて調べる方が、便利なのだ。
テレビさえ、視聴率が落ちている。社会のネット化は、ますます加速されている。インターネットの拡大で、情報は瞬時に伝わる。「アラブの春」と言われた民主化の動きは、インターネットが革命の武器であることを、はっきりと示した。「原発反対」運動や、「反貧困」運動も、総理官邸前の連日の集会も、テント村の動向も、ネットでリアルタイムに流されている。新聞やテレビ等の独占的マスコミが情報を遮断してコントロールしても、情報はネットを通して伝わる。
年々進歩(?)する通信技術で、ネットを使えば、情報が大変安価で入手できるようになった。そこから情報や知識をチョイスして、コピーして送信すると、りっぱな文章となる。コピーして、コピーされるのが、当たり前となった。そのため、言葉が、軽くなってしまった。軽い、軽くて薄っぺらで、一息で飛んでしまいそうな知性であり、理性となっている。このネット上で意見を述べると、それで他者と、社会とつながっている気分になってしまう。
個人としての「私事」の情報も、多量発信される。メールの発信と受信、ブログの公開等々、遠くの見たこともない誰かとつながっているような気持ちになれる。でも、これは、会話ではない。一方通行なのだ。相手の言葉の中に隠れている感情のひだが、なかなか読み取れないのだ。言葉にならない、感情の動きが分からない。これがないと、コミュニケーションをしていることにはならない。人間は全身で感情と思いを表すものなのだから、このネットに頼っていてはコミュニケーション能力は向上しない。
ネット検索して、言葉や思想について調べることもある。でも、ネット上に書かれている言葉や文章や写真等を見たり読んでも、分かったつもりになっても、実は思考は深まっていない、ということだ。つまり、「読む」ことができにくいのが、ネットなのだ。
書かれていることを印刷して活字として取り出さないと、「読む」ということにはならない。「読む」とは、何度も何度も繰り返し読み、そして時にはノートに写すことで、書かれている文章の間からその真意を読み取り解釈(行間を読む)する、ということなのだ。それが、ネット上では、読むのではなくして見ることになっているために、これができないのだ。
書物を開いて読むとは、書かれている文字を追っている時には、その人なりの感性が同時に動いている。そして、理性も伴っている。感情や思考を動かしているから、文章が読めるのだ。そしてさらに、心的な映像を描きながら読解している。
この差をきちんと理解しないと、とんでもないことになる。このネットの便利さに流されてしまうと、「積極的に主体性を発揮しようとする」個人なんて、まったく形成されなくなってしまう。
さらに、ネットやテレビの最大の問題は、情報と物を販売する経済活動であることだ。休む暇なく刺激して、モノを買い換え消費することを美徳としている。このことに疑問を抱くことのない消費者作りをしている。こう言えよう。人間が情報を得ているのには、

視覚が 55%、聴覚が 38%、言語が 7%であると聞く。だから、パソコンの「ブログ」は、商品販売のセールスマンなのだ。このように解釈しても、大きな間違いではない。

2 イノベーター理論

では、このような「社会意識」や「集団性」の現状の人たちに対して、どのような対処をしたらよいのであろうか。社会運動に、可能性はもうないのであろうか。ともすると、絶望してしまう現実がある。

そこで、以下にイノベーター理論を掲載する。この理論を参考にすると、私たちにも社会の在り方を変更する可能性が、充分あることに気付く。

① 「普及率 16%の論理(イノベーター理論)」で考える

これまで書いてきたような状況だと、日本社会が、私たちにとって良くなることなど不可能なように思えるかもしれない。「世間」なるものに固められている社会意識、そして、他者との関わりを避けようとしたり、集団になることを嫌う社会心理、そしてマスコミ等にふりまわされる空虚な「他人指向型」の社会心理について書いてくると、絶望感ばかりになるかもしれない。ネット時代では、先に書いた「こだわりを相互交流できる場」ができても、「積極的に主体性を発揮する」社会意識が多数の人たちに形成することは、とても難しく思われるかもしれない。

でも、次に記すことを考慮に入れると、そんなに困難なことでもない。このことについて、少し考えてみよう。

これは、1962 年にスタンフォード大学の社会学者であるエベレット・M・ロジャース(Everett M. Rogers)によって提唱されたものである。新製品や新サービス、そして、ライフスタイルや考え方等が世の中にどのように浸透していくかに関する理論である。

このイノベーター(革新者)理論によると、購買者を次のように分けられる。

〇革新者 2.5%

冒険的で新商品が出ると進んで採用する人々の層。この層の購買行動においては、商品の目新しさ、商品の革新性という点が重視される。この層は革新性は高いが、極めて少数で価値観や感性が社会の多数派とかけ離れている為、全体への影響力は、あまり大きくない。

〇初期採用者 13.5%

社会と価値観を共有しているものの、流行には敏感で、自ら情報収集を行い判断する人々の層である。他の消費層への影響力が大きく、普及の鍵を握っているとされている。新製品や新サービスが提供する利益や恩恵が必ずしも万人に受け入れられるとは限らないため、市場に広く浸透するかどうかはこの層の人たちの判断や反応によ

るところが大きいとされる。この層の人たちの動向が、新しい価値観や利用法を他の人たちに提示する役割を果たしている。

★「普及率 16%」---市場が拡大したり、考え方等が世の中に浸透していくかどうかの分岐点

〇前期追随者 34.0%

新しい様式の採用には比較的慎重な人々の層。慎重派ではあるものの、全体の平均より早くに新しいものを取り入れる。初期採用者の層の人たちからの影響を強く受け、新製品や新サービスが市場全体へ浸透する為の媒介層である。

★でも、初期採用者と前期追随者の間には、容易に超えられない大きな溝があることを、忘れてはならない。

〇後期追随者 34.0%

新しい様式の採用には懐疑的な人々の層。周囲の大多数が使用しているという確証が得られてから同じ選択をする。新市場における採用者数が過半数を越えた辺りから導入を始める。

〇遅滞者 16.0%

最も保守的な人々の層。流行や世の中の動きに関心が薄く、これが伝統化するまで採用しない。中には、最後まで不採用を貫く者もいる。

この理論を、社会意識や政治意識にも、それなりに転用することができそうである。

<「保守的な意識」>

後期追随者と遅滞者で、50%になり、これが分厚い保守的な意識をしている人たちとなる。どのような商品でも、どのような社会問題でも、いかなる政治的危機においても、遅滞者の層は変化を求めることなく、今まで通りの生活をしようとする人たちである。そして、後期追随者の層の人たちは、できたら今まで通りの日々の暮らしが続くことを強く望んでいる人たちである。自分のことに関係ないことには、心を動かされることのない人たちであろう。でも、自分の日々の生活にどうしても関わることには、それなりの対応をしようとする。そして、周囲の人たちのしていることを、少しは気になる人たちである。

この二つの層に最も多くの人たちがここにいることから分かるように、保守意識はいつの時代も多数派の意識なのだ。このことを、大前提にして、問題を考えなくてはならない。この二つが強く結びつくと、そして他の層の人たちがばらけると、保守的な政権ができることとなる。

だから、新しいことを始める人は、このような後期追随者と遅滞者の人たちを直接的に対象とした商品を企画しようと努力することにエネルギーを使うことはないのだ。また、社会運動を企画する者は、このような人たちを重視した活動をする必要はない。

彼らは自分のことで悩んだり、他者や社会とのつながりのことで心を痛めることはあまりないからだ。「積極的に主体性を発揮する」社会意識なんてことは、このような 50%の人たちにとって、どうでもよいことなのだ。だから、まずは、配慮の外にしてよいことになる。

社会運動を起こす中心的核となる人たちは、革新者の層であろう。核となる人は、まずは、初期採用者の人たちまで運動が、その影響力が広まることを目指す諸活動をするのが初期の目標となる。そして、この初期採用者の層の人たちの心をとらえることができたなら、運動はまず成功だといえるであろう。この段階で、革新者と初期採用者を合わせた 16%の支持を得たことになる。東日本大震災後の東京電力福島原子力発電所の事故の後の反原発運動の盛り上がりは、この層の人たちの心をとらえたものであろう。

そして、ここまで運動が広がると、次は前期追随者の人たちへの配慮が必要となる。この層の人たちへは、スローガンを叫んだり、反権力的演説をしても、それだけでは心に響かない。ここには、容易に超えられない大きな溝がある。今までの仕方では、前期追随者の層の人たちの心に届かない。

ここでは、この反原発運動が個々人の日々の生活に関わる問題であることを、懇切丁寧に語りかけることが必要であろう。反原発を激しく叫んだり、反権力の演説をしても、万人規模の集会やデモをしても、この層には響かない。原子力発電をすることが、それを続けることが、生活をどのように脅かしているかを、丁寧にきちんとことあるごとに話しかけることである。それまでの革新者と初期採用者の層にしたような対応では、前期追随者の人たちからの支持は得られない。

この前期追随者の人たちへの働きかけをする時に、西研氏の言う「集団性を嫌う」意識に配慮することや、リースマンの言う「他人指向型」の社会心理に留意することが、必要となる。この層の支持が得られないと、政権を獲得することができず、社会経済システムの変更をすることができない。だから、ここからが、運動体としては、本当の正念場となる。

また、この時、運動や組織等の在り方を巡って、組織内に亀裂が発生することになる可能性が高い。今まで通りの運動スタイルをしようとする者と、組織の在り方と運動方針の転換をしようという人たちとに二分される可能性がでてくる。この内部抗争を乗り切らないと、前期追随者の層の人たちの支持は得られない。この時、左派を切り捨てるか、左派を批判勢力として内部に取り込んで運動の転換・発展をさせることができるか否かが、最大の焦点となる。

この亀裂をうまく克服できたならば、そして前期追随者の層の人たちの支持が得られたのであれば、革新者と初期採用者と前期追随者の層を合わせて 50%の支持となり、政権の獲得ができることとなる。そして、具体的政策を実行していくことで、後期追随者の層からも支持者が生まれてくるようになり、新政権は安定する。

実際にはこの通りにいくことはないが、社会運動をしている者にとって、このような視点は、必要となるであろう。

まとめると、私たちは、革新者と初期採用者と前期追随者の層の人たちのことを考え配慮に入れて行動すればよいのだ。そして、まずは、初期採用の 13.5%の人たちの支持を獲得するために、運動をすればよいことになる。こう考えると、絶望することなどないのだ。社会をよりよくしていくことのでき得る可能性は充分にある、と言えるであろう。絶望することは、愚かなことなのだ。

2 前期追随者 34.0%の層の人たちまで運動を広げていくために

★次の文章は、「さよなら原発 1000 万人アクション」へ送った私の意見(一部省略)である。イノベーター(革新者)理論の前期追随者 34.0%の層の人たちまで運動を広げていくために、次のように提言した。

意見を書きます。今までのたくさんの言動や、7 月の全国集会への意見です。
7 月の全国集会は、ひょっとすると今後の日本社会に大きな動きをもたらすかもしれないとの思いから、日ごろの仕事を一時中止して駆けつけました。たくさんの人たちが集まっていた。人の数に、圧倒された。しかし、以下のような思いが次々と浮かび上がってきました。そのことを、書きます。

政治は大切なことですが、運動をすぐ権力問題に直結するのには問題があります。

今まで、国民の多数は、原子力の平和利用を強く期待していたのです。そのことが、漫画家の手塚治虫氏の描いた鉄腕アトムにはっきりと出ています。アトムは、原子力エネルギーで動いていました。それを、石油等の化石燃料のような形でロボットの体内に取り入れている漫画が描かれていました。このような漫画から分かることは、多くの国民は、科学の進歩で、原子力エネルギーが、いつの日か、近い未来に、人間がコントロールできるようになることを期待した、ということです。また、原子核分裂の意味を理解していないということです。原爆の被ばくで苦しみ悲しんだがゆえに、このことを熱望したのです。このような意識だったために、今まで反原発の運動に対して、賛同する人たち多数派になかなかならなかったのです。

今もまた、西日本の多くの人たちにとって、福島での原発事故は他人事なのです。南海地震によって原発事故が発生するかもしれないとは思いつつも、・・・。原発事故への不安を抱きつつも、それより、電力不足で便利な生活ができないことに、イラつくのです。都会で生活している者にとって、エアコンが使えないと夏を越せない現実があるためです。夜、眠ることもできません。私は田舎で住んでいるので、家の中で一番涼しい部屋でいると扇風機だけで寝れます。窓を開けていると夜の 10 時になると空気が涼しくなり、薄着で寝ていると朝は窓を閉めないと寒さを感じます。それでも、台所と居間はエアコンをつけないと、食欲がなくなり、テレビも見れません。このような

日々の生活の次元で思考している者にとって、反権力の運動を指し示すより、代わりの電力を得る諸方法や別の生活スタイルの提案をして宣伝する事の方が、説得力があります。このような幅広い運動が展開されないと、反権力を叫べば叫ぶほど、③前期追随者 34.0%の層の人たちの支持は低くなります。

また、原子力エネルギーが操作可能なものでないことを知らせる活動に重点を置くべきだと、思います。原子炉は試行錯誤の実験を繰り返してその技術が進歩することのできるものでないこと、だから原子炉以外の技術がいくら進歩しても、原子炉は考案されてから今まで技術進歩していないこと、そして今後も技術が発展することのないことを、だから今後安全性が高まることのありえないことを、ことあるごとに繰り返し啓蒙していくことこそが大切だと思います。

私は政治活動を否定するつもりはありません。そう思って、7 月の東京での集会には参加しました。でも、その時会場をいろいろと周って参加者の様子や話していることを聞くと、いろいろと問題点が感じ取れました。

全体集会で話されていた人の中には、呼びかけ人の中には、政府批判に終始していた人がいました。これはよくありません。今まで形成されてきた原発推進の産学官の強固なブロックを突き崩すことの困難さをどの程度理解しているのであろうか。原発の廃棄の政策を実施することへの具体的見通しを持っていないので、革命を叫んでいるのでしょうか。福島の現場での被害の甚大さを訴えたいとの思いからでしょうが、マイクで激しく政府を批判する人が多かった。

これでは、運動の拡大はないと思います。今までの原発政策の問題点、今までの政治環境では原発廃止を言うことが困難だったこと、原発推進の産学官の強固なブロックについても丁寧に説明していただきたいのです。そして今後のエネルギーの在り方等を、そして、私たちの生き方の変更をしなくてはならないことを、繰り返し語り丁寧にかけるべきだと思いました。もっと具体的な話をしていただきたいものです。反権力闘争を語るのではなくして・・・。

話す時間が制限されていても、・・・。一つ一つ、その機会に、その時に、語りかけていただけたいものです。このようなことが改善できないと、反原発の大きなうねりにはなかなかならない、と思います。

★先に書いている私の住んでいる地域のような社会的流動性の弱い所では、初期採用者の支持を得ることが、きわめて難しいのが現状である。それで、苦闘することとなる。正面での支持を得られなくても、後姿の支持を得る工夫を日々しなくてはならないことになる。

補説　　国家行政システム上の問題

「積極的に主体性を発揮しようとする」社会意識や政治意識がなかなか育たないことの理由は、このことは、政治的にははっきりしている。

① 日本は、きちんとした主権国家ではない!

TPP 参加問題で、ここから分かることは、「日本は、きちんとした主権国家ではない」と言うことだ。このことが、外交問題で、特に対米関係では、はっきり出ている。「日米安保条約」「日米地位協定」で、ガチガチにからめ捕られている。アメリカの属州あつかいなのだ。日本国は、今の世界システムでは、主権をはっきりと主張することが難しい。どのような政権でも、この現実に、向き合わなくてはならない。中国とアメリカの中間に立とうとした民主党の鳩山氏と小沢一郎氏になされたことを見ても、このことが分かる。

② 会員様以外は、お断り!-形だけの民主主義-

「積極的に主体性を発揮しようとする」意識がなかなか育たないもう一つの理由は、今まで自分たちが頑張って活動して、社会が良くなったという体験がないためである。自分たちの社会的要求が、これまで門前払いされてきたためである。国政でも、地方自治体でも、そして自治会でも、ある一定の会員資格でないものには、参加する資格が与えられてこなかったのだ。これが、自民党という政党のしてきた政治である。

国会や内閣で掌握できない組織がある。日本国の中に、二つの国家(比喩)がある。一つは、自民党と財界とキャリア官僚たちがスクラムを組んでいる、組織である。この組織は、ものすごく強力である。この組織が、国家財政を食い物にしているという実態がある。この組織の会員でないものは、発言権がないのだ。もう一つは、天皇制である。これを支えている皇室の財産に、手を付けることができなかった歴史がある。

国政では、大企業やキャリア官僚たち、そして自民党の議員たち、その周りにいる取り巻きたち以外は、無視されることがほとんどであった。政治は、会員制の高級料亭でなされてきたようなものであった。資格審査で弾き飛ばされた人は、入れる資格のないものは、初めから除外されてきたためである。多数決という形式だけは行われて、・・・。このようなことは、自治会内でも、よく似たことがされることがされてきた。自治会内政治も、自民党的であった。

日本の政治は、二大政党政治は、まだヨチヨチ歩きを始めた段階である。この前の民主党による政権交代は、それまでのように「会員」様にすりより利益享受を求めていた意識が流動化した結果である。また、国民の多くの意識が、リースマンのいう「他人指向」そのものになっているためでもあろう。21 世紀になって行われた選挙に、2005 年の郵政解散、2007 年の参議院選挙、そして 2009 年の衆議院選挙、そして 2012 年選挙に、このことが明瞭に現れている。2012 年選挙では自民党が勝利したが、

それが長期にわたり固定化することは考えられない。その時その時で、勝利する政党は大きく変わっていく可能性が、大きくなっている。

このことを悪く言えば、マスコミ資本の流す情報に大きく左右されているのであり、良く言えば、私たち国民は、ようやく政権交代で失敗する可能性があることを無自覚的に選び取った、とも言いえるであろう。これは、小選挙区制という選挙制度で、このような二大政党による政権交代が成立する環境ができたためである。このような政権交代が定着すれば、政治の、政策決定の透明性が増し、政治意識が今以上に向上するかもしれない。

③ 直接民主制が機能していない

政治的な諸要求は、議員を通したり、圧力団体を通してでないと、実現することが難しかった。政治システムが代表議会制民主主義なので、私たちの一票が実際に物事を決定する直接民主制ということを体験することもなかった。国民投票など経験したことがない。ここに、国家システム上の最大の問題がある。直接民主制が機能していないのだ。直接民主制が機能しなくて、国民の政治意識が高まることなどありえない。

特に、地方自治体で直接民主制の機能が活性化していることが重要である。しかし、市町村合併でも、議会で決めてしまい、住民投票で決定した自治体は少ししかなかった。これでは、政治意識は、高まらない。だから、地域社会の構成員である住民が意思決定に積極的に関与できる仕組みにしなくてはならない。これなくして、「積極的に主体性を発揮しようとする社会像」は、形成されないであろう。

④ 組織と制度に対する信頼度が低い!

組織と制度に対する信頼度の違いを、日本とスウェーデンを対比して示したい。

	(非常に信頼する＋やや信頼する)		(あまり信頼しない＋まったく信頼しない)	
国会	日本 21.4%	スウェーデン 53.7%	日本 70.9%	スウェーデン 44.1%
政党	16.8%	32.8%	75.2%	65.3%
政府	29.1%	41.9%	64.7%	57.1%
行政	30.2%	65.1%	62.0%	29.2%
労働組合	30.3%	49.9%	50.0%	46.3%

＊公務公共サービス労働組合協議会(2012 年 7 月)より転載

＊電通総研、日本リサーチセンター編「世界主要国価値観データーブック」2005-2006 年調査結果

この違いには、驚かされる。スウェーデンの信頼度は、日本の二倍近くある。特に、

行政と国会(2010 年総選挙の投票率 84.63%)への信頼度の高さは、日本では考えられない数字である。この違いを、私たちは考えなくてはならない。

この数字が書かれているのと同じページに、次のように書かれている。何故スウェーデン国民は高い租税・社会保障負担を受け入れているのか。という問いに対して、「スウェーデンの公共部門や国が行っている事務・事業に対して、買収(汚職)などはほとんどない。そういう意味で信頼感が非常に高い。」
と答えている。すごい、日本で、このような返答はとてもできない。

同じページに、OECD の調査による汚職指数も示されている。日本は 67、アメリカ 67、デンマーク 15、フィンランド 17、スウェーデン 20、そして金融危機に陥っているギリシャは 89 と記載されている。スウェーデンでは、この高い信頼性のある仕事を多くの人が頑張ってしているようだ。

次に日本とスウェーデンの就業者の部門別割合(2008 年)を記載したい。

民間	日本 93.0%	スウェーデン 68.0%
公共	7.0%	32.0%
中央政府	0.6%	5.4%
都道府県	3.4%	6.1%
市町村	2.9%	20.5%

市町村職員が高い社会福祉を支えていることが、この数字からうかがえる。たくさんの公務員が、公共の福祉に関する仕事をしている人たちが、誠実な仕事をしているのだ。そして、そのことが、それなりに評価されているのだ。職場の人たちが相互に支えあい、労働組合に守られて、不当な圧力を跳ね返していることが、よく分かる。ここが、日本との大きな違いである。

32%もの公務員がいる。10 人の内 3 人の人が、公共部門で働いている。小さな政府ではない。公共部門の人たちが頑張っていることが、よく分かる。さらに言えば、アメリカでさえ 15%弱の公務労働従事者がいる。日本の二倍(人口比)の人たちが行政の仕事をしている。女性の就業率が高い。その多くが、高齢者福祉や児童福祉の分野等で働いている。これまで女性が担ってきた育児や介護等の福祉サービスを充実させることで、ここに新しい雇用を作り出している。(＊全員参加型の労働社会)

スウェーデンでは、

私たちは、まずこの実態を知らなくてはならない。このことを知らないから、自民党やマスコミ資本の流すテレビを見て、公務員批判を繰り返す国民がたくさんいる。悲しいかな、これが現実の日本国民の意識状況である。

日本では、自民党や財界は、公務員に対して、事あるごとに分断政策を取ってきた。そのため、職場は差別と意味のない競争を強いられてきた。仕事は上司に向けてなされていて、地域住民の方を向いてしていては評価されないようになってしまった。こ

れでは、組織と制度に対する信頼度が高まるはずがない。

スウェーデンのすごいところを、さらに一つ明記しておきたい。

2011 年 EU 各国の GDP に占める政府負債の割合(%)

ギリシャ 165.3%	イタリア 120.1%	フランス 85.8%
イギリス 85.7%	ドイツ 81.2%	スウェーデン 38.4%

⑤ 自己総括がなされていない

さらに、次のようなことも考慮に入れないといけない。『見たくない思想的現実を見る』(金子勝　大澤真幸　岩波書店)の第 4 章「韓国を鏡に日本のナショナリズムを見る」から、引用して考えてみよう。＊引用するのは、金子勝氏の文章である。

> ・・・確かに日本の学生運動世代も生死をかけた闘いをした。しかし、・・・この国には、「新しい左翼」など何処にも存在しなかった。・・・かつての学生運動世代が市民運動や地域運動を担っている事例数多くある。・・・しかし、主張が同じでも、かつての人のつながりという壁を越えることもなく、それぞれが閉じこもって運動を続けているケースが多い。
>
> 団塊の世代に欠けているのは、「敗北の世代」としての厳しい自己総括だ。・・・民主主義という点から見て、この国は韓国よりはるかに遅れてしまった。・・・日本の学生運動世代は、企業や学校や地域社会において排除性を高める以外に新しい文化や思想を生み出さなかった。世界を見渡せば、多くの国々や地域で、この世代から次々とリーダーが排出されている。ところが、この国では、責任をとらない上の世代がまだ居座っている。・・・この無責任体制の担い手たちこそが、憲法改正を声高に主張する。・・・だが、団塊の世代は、戦争責任を曖昧にしてきた世代を追い出すことができなかった。

ここには、日本の政治風土の貧しさが記載されている。自民党は、してきたことに責任をとらない。国家行政に寄生して、税金から利益をかすめ取ってきた。国家的政策を実際にしてきた官僚たちも、企画した事業が失敗しても、別の部署に転任してそれで済ませている。

私たちにとっての問題は、このことではない。このような政治に反対してきた人たちも、実は自分たちのしてきた社会的運動や選挙運動に対して、総括をしてきていないことが多い。自己総括をすることなく、他人事のように社会問題や政治問題を批判する人たちが、少なからずいることだ。

社会運動や選挙をお祭りとして、時とともに忘れて風化されるだけとなってきた。これでは、政権奪取なんて、とてもできるものではない。政治的な「積極的に主体性を発揮しようとする」意識が育たない理由が、ここにもある。